

大阪のアートを語り伝える展覧会 学生のモダンな制服も再現

100年前の大正13(1924)年、市内に二つの美術学校が誕生した。4月に大阪市西区に小出橋重、鍋井克之らの信濃橋洋画研究所(大阪市顕彰碑有り)、6月に天王寺区(当時は南区)に矢野橋村、福岡青嵐、斎藤与里らの大阪美術学校が開校したのである。背景には、大阪市立美術館の建設や大阪市立工芸学校(現・大阪府立工芸高等学校)の開校、大阪市美術協会の設立など、大正14年の第2次市域拡張で“大大阪”になることを意識した市による文化振興策と、大阪の文化的向上をめざした画家たちの積極的な活動があった。

信濃橋洋画研究所は、この夏に芦屋市立美術博物館で回顧展が開催されたが、大阪美術学校に関しては、この11月13日から枚方市総合文化芸術センターで「大大阪モダニズムと大阪美術学校」展が開催される。

大阪美術学校が開校したのは、現在のJR天王寺駅のすぐ北側を東に進んだ悲田院町である。洋館風の広い木造家屋を借りて校舎とした。日本画の矢野橋村を校長に、基礎を学ぶ本科3年を経て、日本画、洋画に分かれた専攻科2年に進んだ。第1期生に男子120人、女子30人が集まったという。



熱気に溢れた大阪美術学校の石膏室。女子学生の姿もある。

校舎の隣家は、クラブ化粧品で知られた中山太陽堂(現・クラブコスメチックス)の社長中山太一の自宅で、大阪美術学校の建物には、中山が設立した出版社のプラトン社もあり、学校の並びにプラトン社の編集長小山内薫も住み、美術学校では作家の直木三十五も教えていた。

「第1回大阪美術学校展」を心齋橋で開催したときは、美術学校のやんちゃな学生らしく、セザンヌ、ゴッホ、雪舟、池大雅などの像を「画聖像」と称して会場に祀り、作品の搬入も、襪を立てた十数台の荷車に作品を積み、セザンヌの顔の大きな造り物も一緒に、悲田院町の校舎から心齋橋筋までパレードしている。

昭和4(1929)年、大阪美術学校は、現在の枚方市御殿山町に移転し、4800坪の敷地に講堂も備えた400坪の白壁の瀟洒な新校舎を建設する。付近には昭和3年に大阪

女子高等医学専門学校(現・関西医科大学)も開校しており、京阪電車は、学園の駅として御殿山駅を新設した。今回の回顧展が枚方市で開催されるのはそのためである。

この展覧会には、矢野橋村、福岡青嵐、斎藤与里ら教師陣や、学生では日本画の直原玉青、清水要樹、月居偉光、平山正、洋画家の園部晋、胡桃沢源人、菅井汲らの作品が出品される。胡桃沢源人の妻で日本画科の卒業生である融紅鸞の作品も出品されるが、ラジオ大阪の「悩みの相談室」では、家庭問題に「あんさん別れなはれ」と答えていたことで紅鸞さんをご記憶の方もおられるだろう。

展覧会での特別企画が、写真しか残っていなかった斎藤与里デザインのモダンな女子学生の制服を、St. Odium(セントオーディン、大阪市西区)のデザイナー、永井純さんが再現してくれたことである。「与里先生デザインのオリジナルに近づけたかな。面白い企画でした」と永井さんは語る。美術のみならず、大大阪モダニズムを総合的な生活のアートとしてとらえる試みでもある。



再現された制服。斎藤与里がデザイン。制作、St. Odium(セントオーディン)永井純。横の油彩画も斎藤の作品。撮影協力・フロムクローズ

戦前の大阪のアートシーンを知る意味で、信濃橋洋画研究所と大阪美術学校の回顧展は、大阪市内で開催されると良かったが、芦屋や枚方などゆかりの土地での開催となったことは、彼らが今もその土地で深く愛されていることの証明だろう。大阪の歴史を知る上で、ぜひとも会場にお運びください。

「大大阪モダニズムと大阪美術学校—創立100年枚方移転95年記念—」
令和6年11月13日(水)~24日(日)(会期中無休)会場・枚方市総合文化芸術センター本館ひらしん美術ギャラリー、入館料無料

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現像—」(創元社)など。